北海道放送

活動名	ＨＢＣアナウンサーによる読み聞かせ
実施期間	令和６年７月～令和６年 12 月
実施回数	会場 10 回

【事業実施の成果・課題】

2023 年度に続き、札幌市内の 10 校を訪問し、各校 2 人ずつのアナウンサーが読み聞かせ等を実施しました。読み聞かせ前の“ウオーミングアップ”となる早口言葉の内容なども担当アナがそれぞれ考え、子どもたちにより親しんでもらえるよう工夫を凝らしていました。また、事前の練習では中堅のアナウンサーが「講師」としての役割を果たし若手を指導するなど、アナウンス部内での技術の伝承にもつながっています。そして実際の読み聞かせでは、普段のニュース読みなどとは違う声の作り方や間のとり方など飽きさせない読み方を追求し、子どもたちに喜んでもらうと同時に自分たちの表現力をアップさせることもできたと感じています。

今後の課題としては、さらなる内容の充実を考えていくことが挙げられます。今年度は 10 校中 3 校で、読み聞かせに加え、カメラを触ったり中継車に乗ったりする「TV 体験」を実施し、子どもたちのみならず先生方からも喜びの声を頂きました。部内・社内の人繰りなどで難しい面はありますが、こうした放送局ならではの体験をしてもらうことは放送業界全体にとってもプラスになると思います。引き続き効率的な開催方法などを検討すると同時に、読み聞かせ自体についても子どもたちにより大きな興味をもってもらえるような工夫をしていきたいと考えます。

【事業担当者およびアナウンサー（講師・読み手）の感想】

＜堀内美里アナウンサー＞

今回は初めての試みとして、ギャグに振り切れた絵本を選びました。ただ勢いだけで終わらせず、しっかり聴かせるための緩急をつける練習になりました。（7 月 16 日＠幌西小学校）

＜糸賀舜アナウンサー＞

練習などで何度も読んでいると慣れが出てくるが、その慣れにより絵を見てもらう間が短くなったり物語の意外性に気づけなくなったりする。初めて読む子どもたちが、どのように絵と物語を受け取るのかを常にイメージすることが重要だと感じた。（7 月 16 日＠幌西小学校）

＜森結有花アナウンサー＞

身体の大きさや好みが正反対のクマさんとヤマネくんの違いを表現するため、声のトーンやスピードに加えて、音の圧でも変化をつけることに挑戦しました。私は声の圧が強い方なので、聞いている方が疲れないよう、今後は音の圧も自由に調整できるようになりたいです。（10 月 18 日＠鴻城小学校）

＜大竹彩加アナウンサー＞

一方通行の読み聞かせではなく、読み手と聞き手が自然と一つになった結果、絵本の「拍手をお願いします」というセリフの後に子どもたちが自発的に拍手をしてくれたり、「5・4・3・2・1」のカウントダウンを一緒に大きな声で言ってくれたりと、絵本を通して対話ができた。（10 月 30 日＠手稲中央小学校）

【教諭・保育士・子どもたち・視聴者などの感想】

＜先生方からの声＞

・「プロの読み聞かせで児童たちにとてもいい刺激になった、読み聞かせの参考にしたい。放送委員会の活動が活発な学校なので、放送委員会の児童はうれしかったと思う」（10 月 18 日＠鴻城小学校）

・「馴染みのある名作でも強弱や抑揚をつけた読み方、登場人物の声の使い分け、身ぶり手ぶりを交えることで全然違う作品のようだ」（8 月 30 日＠平岸西小学校）

・「今日は子どもたちの目がキラキラしていた。アナウンサーに憧れを持ったと思います」（9 月 25 日＠手稲宮丘小学校）

＜子どもたちの反応・声＞

・「オイラたち、オニじゃないよ！…おにぎりだよ！」というダジャレのような部分で大笑いしてくれた。「声が大きくハキハキしていていた」という技術的な感想だけでなく、「おにぎりが食べたくなった！」「お金をかけないでおにぎりを作れるのかな？」「ツノを取るの、痛くないのかな？」といった子どもらしい自由な発想の感想も出て嬉しかった。（9 月 25 日＠手稲宮丘小学校）

・「カメラをもたせてくれて、ありがとうございます。おもったよりおもかったです。あと、くるまにのせてくれてありがとうございます。いっぱいボタンがあってびっくりしました。」「えほんのよみきかせありがとうございました！がくしゅうはっぴょうかいのれんしゅうのおてほんでした！」（11 月 19 日＠東苗穂小学校）

※読み聞かせ・TV 体験実施の後、参加児童からお礼のメッセージカードが届きました。
その中からの抜粋です。